

は遠く相反する光景で有つた。明るさと和らかさが教室に溢れるやうに私には感ぜられた。

實に熱心に教へられた。前述の如く、此假入學の生徒は、何れの科に入る者も一緒になつて居たので、他科に入る者の中には木炭畫など疎かになり勝ちの者、又た箸にも棒にも懸からぬと云つた幼稚な者でも、何の區別も無く自ら手を取つて教導せられる事に懇切を極められた。

當時、岡田先生は圖案科の教授であつて西洋畫科の教授で無かつたことを後に知るに及んで稍々——意外の感がした。それが假入學を終り、愈々西洋畫科の豫備科の生徒になつた時には岡田先生の教から離れる事になつたので甚だ淋しく感じた。(岡田先生が西洋畫科の教授に轉ぜられたのは私が卒業後の事である)〔下略〕

〔三の橋時代、帰朝當時の岡田先生〕南薰造『画人岡田三郎助』昭和十七年。春鳥会)

〔上略〕予が先生を師と仰いだ初めは、明治三十五年、先生が西洋から御歸朝された直後、美校圖案科の洋畫教授の任に當られた時であつて、爾來三十何年間の久しい間に互り、公に、私に、畫に、工藝に教を乞ふ期に恵まれたのであつた。御歸朝當時學生等は此の新知識の先生を迎へて洋畫はもとより工藝圖案の御指導にまでも大いに期待をかけたが、當時の圖案科は日本趣味の旺盛な時代であつたが爲めに、先生の趣味蘊蓄も死蔵の止むなきに至つたことは、今日から想ふと洵に迷惑至極なことであつた。予は

洋畫家にならうとは思はなかつたので、其の方面には餘り熱心ではなかつたが、それにも拘らず先生は懇切丁寧に教導せられ其時に描いて頂いた御手本は今に大切に收藏して居り之を観ることに慚愧に堪へない、先生の御性格は洵に温厚であり、人に對して障壁を設けず言語も態度も一視同仁の趣があり、アトリエへ侵入した夜盜と平氣で閑談を交はされたことなどは有名なことである。洋畫専攻の學生等に對する教授振りの委しいことは知らないが、圖案科生徒等に向つては其の習作を一々入念に吟味され、如何なる拙作に向つても決して之れは駄目だ、遣り直さんければ、などと言はれたことはなく先生自づから筆を執られ、惡い點を丁寧に直されるといふ風であつたから、生徒からの信望も厚く、恰かも慈母の如くであつた。

〔追想の二三〕小場恒吉。同右)

② 浅井忠帰国

明治三十五年八月二十一日〔東京美術学校旧職員履歴書〕による、浅井忠がフランス留学を了えて帰国した。しかし、浅井は本校へ復帰せず、同年九月十一日に京都高等工芸学校の教授となり、京都に移住したので、留学の成果は直接本校を利することにはならなかつた。転任の事情については正木直彦が次のように記している。

然るに、白馬會の一派が美術學校へ入つて洋畫の教授になつたのに對して、これと對立してゐた明治繪畫會〔美術〕から、

『自分の方にも美術學校に一つ教室を持たなくてはならん！』

と云ふことを主張するに至つた。遂にその要求は容れられて、明治繪畫會〔美術〕のメンバーの中から、浅井忠が選ばれて美術學校の教授になり、小坂象堂が助教に採用されたのであつた。しかし、斯うして入つては見たものゝ、後から入つたのと、更に洋畫科といふものが學生は自らの好む教授の居る教室に行く——といふ事になつてゐたので、皆黒田の方へ集り、折角教室は設けたが浅井の方に赴くものは誠に尠かつた。だから、入るには入つたが、學生は來ず、一向詰らん、と云ふ有様であつた。

この中、明治三十三年に巴里に萬國博覽會が開かれるので、これに黒田、久米、浅井の三君は學校から出張させられ、岡田、和田の兩君は留學生として渡歐することになつた。「浅井も留學生として渡歐した。——編者註」私はそこで浅井忠と會つたのであるが、極めて酒脱〔酒〕で面白く、誰にも好かれるやうな人柄であつた。話して見ると、前述のやうな工合で、美術學校へ入つては見たが面白くないと云ふ。

たま／＼、そこへ京都に高等工藝學校をつくるといふ目的を以て、其の準備と視察とを兼ねて、中澤岩太君も巴里へ遣つて來た。その中澤君が私に、

『高等工藝の西洋畫の教員を物色してゐるが適任者は無いか?』と云ふことであつた。そこで私が浅井忠の話をする、早速中澤君は浅井に會つて、

『どうだ、京都へ來ないか?』

と勧めたのであつた。間もなく浅井が私のところへ來て、『京都で洋畫の店開きをするのもいゝと思ひます。文部省の方

を一つ宜敷く頼みます』と云ふことであつた。こんな事で、浅井は京都の高等工藝學校が出來るとそれへ轉任した。

〔回顧七十年〕正木直彦。昭和十二年。学校美術協会出版部)

なお、浅井は留學中の三十四年十月一日から翌年三月まで和田英作とともにグレに滞在したが、和田の「画壇の四十年・足跡を顧みて」四十九頁五十五(『東京毎夕新聞』昭和九年十一月二十一日)同三十日)にはその間のことが詳しく記されており、そのなかで、和田は浅井の画風の変化に触れて次のように述べている。

グレに於ける私と浅井君との生活は、巴里のそれにひきかへて頗る静かなものでありました、その代り製作は可なり澤山出來て、浅井君の有名な洗濯場や、ポブラのある風景や、グレの古橋、グレの橋、グレの秋、農婦、寺院などはその時出來ました、浅井君はグレへ移つてから、從來の畫風に一轉機を作り、穩健な外光派になり切ることが出來たのであります。伊太利風の油繪の教育を受けた、工部美校の出身者は大抵舊派と云はれて、外光派などに轉向することは承知しないものが多いのに、浅井君が印象派の運動にある種の刺戟を受け、外光派の作風をとつたことは、流石に大家の同化力の深い處と感心したことであります。

グレ滞在中のことは、和田と浅井が交互につけた「愚劣日記」によつても窺うことができる。その十月一日より十一日までの分は『ホトトギス』第五卷第四号(明治三十五年一月)に、同月十二日より

十二月十九日までの分は『東京美術学校校友会月報』第二卷第二号（第七号（同三十六年十一月）同三十七年五月）に掲載された。

③ 各科の授業内容

本校における授業の概要が正式に公表されたのは明治三十五年十二月発行の『東京美術学校一覽』（明治三十五年）においてであり、それ以前にはこのような記録は無い。以下、その全文を掲載する。

各科授業要旨

各科授業ノ要旨ハ茲ニ之ヲ述ブルト雖素ヨリ其大要ヲ記スルニ過ギズ 假令之ヲ細説スルモ實況ヲ見ルニアラズンバ隔靴搔癢ノ感アルヲ免レザルナリ 故ニ詳細ヲ知ラントスルモノハ各科教室ニ於ケル授業ノ實況ヲ視察シ又生徒ノ成績ニ考慮シ之ヲ會得スルノ外ナキナリ 而シテ茲ニ一言シ置クベキハ本校生徒教養ノ効果ナリ蓋シ藝術ハ修身ノ業ニシテ僅々數年ノ修業ヲ以テ能ク其効果ヲ收メントスルノ爲シ易カラザル事ハ何人モ知ル所タリ 殊ニ名家鉅匠トシテ聲譽ヲ後昆ニ傳フルガ如キハ自ら天稟ノ才能ト拔群ノ技倆トヲ有スルモノニ非ザルヨリハ得テ望ムベカラザル事ニ屬ス 然レドモ人各所長ノ在ルアリ 好尚ノ存スルアリ 故ニ本校教授ノ要旨ハ成ルベク其人ノ長ズル所ニ副ヒテ之ヲ發展進歩セシムルニ務ムト雖之ヲ約言スレバ本校ハ僅ニ五ヶ年ヲ以テ卒業スル規定ナルヲ以テ茲ニ卒業ト稱スルハ唯技術上ノ端緒ト之ニ適切ナル學科トヲ修得シタルニ過ギズ 藝術ノ大成ノ如キハ各自ガ本校ニ在テ修得シタル素養ニ依リ尙精進不退轉ノ修鍊ニ埃ツノ外ナキナ

リ

豫備ノ課程

豫備ノ課程ハ甲乙ノ二種ニ分チ甲種ヲ日本畫科、西洋畫科、圖按科、漆工科ノ志望者トシ乙種ヲ彫刻科、彫金科、鍍金科、鑄金科ノ志望者トシ其實技ハ甲種ニハ繪畫及志望科ノ實技ヲ、乙種ニハ繪畫及彫塑ヲ課シ並ニ志望科ノ實技ヲ各其教室ニ就キテ學修セシム

日本畫科

日本畫科ノ教室ハ五アリテ毛筆畫ヲ教フ 其授業ヲ分チテ臨畫、寫生、新按ノ三トナシ別ニ郊外寫生ヲナサシム 又其學識ヲ養フ爲ニ特ニ課スル學科ヲ用器畫法及美術解剖トス 臨畫ハ本校教授ノ畫キタルモノ及古來名家ノ筆蹟ニ係ルモノ、簡易ナルモノヨリ漸次複雑ナルモノニ移リ主トシテ其着想並ニ運筆ノ法ヲ修得セシム 豫備ノ課程ヨリ本科三年マデ之ヲ課ス

寫生ハ初メ草木花實ヲ以テシ次デ蟲魚禽獸ヲ教室ニ致シ或ハ動物園ニ就キテ之ヲ寫サシム 其技ノ漸ク熟スルニ及ビ生人ノもでるニ及ボシ本邦古來ノ甲冑ヲ著セシメ或ハ裝束ヲ爲サシメ若クハ當世ノ服裝ヲ寫サシメ以テ有職故實ノ實修ト傳彩配色ノ手法ト物象ヲ正確ニ描寫スル法トヲ教フ 是亦豫備ノ課程ヨリ本科三年マデ之ヲ課シ又別ニ陰影ヲ實寫スル練習ノ爲メニ一學年間毛筆畫時間ヲ割キテ木炭畫ヲ修メシム 新按ハ既ニ學修シタル臨畫及寫生ノ力ヲ應用シ課題ニ依リテ各自ノ意匠ヲ須キテ新作セシムルモノニシテ本科第一年ヨリ第四年マデ之ヲ課ス 殊ニ第四年ニ於テハ臨畫寫生ヲ課セズ主トシテ力ヲ之ニ注ガシメ又其間ニ於テ卒業製作ヲナサシム